

平成26年度
広島市専門家評価
評価報告
(狩小川小学校)

平成27年3月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校2校と広島市立中学校1校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年10月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成27年3月

広島市学校評価システム専門家評価

評価委員会 委員長 林 孝

副委員長 曾余田 浩史

副委員長 高妻 紳二郎

I 評価目的

狩小川小学校は、これまでに「規範性をはぐくむための教材・活動プログラム」リーディング校、「平和教育プログラム」実践協力校の指定を受け、それらの取組を学校経営の重点目標に据え、学校評価の指標づくりを行ってきた。これらの取組に対する客観的な評価及び、中学校区で自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況进行评估し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

II 評価項目

- (1) 学校運営の状況
- (2) 教職員の状況
- (3) 児童の状況
- (4) 学校評価の指標及び評価の客観性や妥当性について
- (5) 小中連携の取組の状況
- (6) 家庭・地域と学校の関係

III 評価方法・作業

1 評価手法

今回の評価方法としては、「II 評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2 データ収集方法

データ収集対象	方 法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
児童	授業等の観察、グループインタビュー
地域の方	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3 作業の経過

時期	内 容	実施主体
4月	・ 専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
6月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り (6/9) ・ 対象候補校の選定 ・ 評価委員会 (評価対象校の決定) ※ 電子メールによる会議	教育委員会 評価委員会
9月	・ 評価対象校、校長からの聞き取り調査 (9/3) ・ 評価委員会 (評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成) ※ 電子メールによる協議	評価委員会
10月	・ 評価チーム会議 (評価計画、今後の予定) (10/1) ・ 学校訪問調査 (教職員からの聞き取り、授業等の観察 他) (10/24)	評価チーム
12月	・ 評価チーム会議 (評価報告案作成) ※ 電子メールによる会議 ・ 学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※ 学校訪問による意見聴取	評価チーム
1月	・ 学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
2月	・ 拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】(評価報告案他) (2/17)	評価委員会・ 評価チーム

4 評価者 (評価チーム)

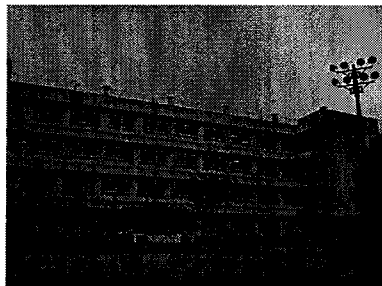
チーフ(評価委員)	高妻 紳二郎 (福岡大学 人文学部 教育・心理学科教授)
評価専門委員	弘法 泰英 (元 小学校長)
評価専門委員	瀧口 典子 (元 中学校長)

IV 評価報告

1 評価・分析結果の概要

【総合的な評価と改善の方向性】

本校は伝統的に地域とのつながりが強く、地域によって育まれてきた歴史を有する小規模校である。平成26年度に校長・教頭がそろって3年目を迎え、今後学校教育活動が順調に展開されて充実期を迎えることが期待される。児童は幼少期から固定された人間関係の中で成長してきたこともあって全体的にととても明るく、あいさつの声もよく出ており、児童間の人間関係も良好で活発な空気がみなぎっているように見



受けられる。近年、マンションや戸建て住宅の急増に起因する本校の伝統の変容が見られた時期はあるが、今日では地域に見守られる学校として安定している。

本校の学校運営や教育活動全体を俯瞰すると、校長の強力なリーダーシップのもと、学校運営がなされているのがよく分かる一方で、授業運営が困難に直面している場面が随所に見受けられる。ほとんどの児童が読書や学習への教員の指示にしたがっていることは大いに評価できるが、時間や規律を守ることや授業風景には各学年で大きな隔りがある。「伝え合いのある学習」「学びあいのある学習」が目指されているものの、とくに中学年においては生徒指導に多くの時間と労力が割かれている状況に鑑みると、それらの学年においては授業研究が進まない状況が今後も継続することが強く懸念される。管理職を含めベテラン教員のスキル・ノウハウを適宜共有できるような機会や場を、たとえば職員室の中で日常的に確保するような工夫が望まれよう。

そうした現状に照らして述べれば、今回の専門家評価にあたって「本校の評価指標の妥当性」の評価については「かんちゃん」「こうちゃん」といった具体的な姿を本校の評価指標として位置づけるにはやや無理があると思われる。協同（共同・協働）学習を推進することには大いに賛同できるが、現段階では必ずしも職員間で合意されているとは言えず、取り組みの質や時間量ともに未達成のまま推移していることを指摘できる。後で述べるように、「学びあい」「伝え合い」の効果を上げるためにはどのような方策が考えられるか、前もって十分に検討することが大切である。



ひるがえって、本校の特徴の一つに、優れた「地域の教育力」がある。地域行事でもある「狩小川子どもフェスタ」への6年児童の取組み・練習の態度も良好で、かかる学校行事の成果も大いに期待できる。学習の進捗についても一定の成果として表れていることは高く評価できる点であり、本校教員の献身的貢献には敬意を表したい。高い目標を掲げることは大切であるが、各種調査の結果は概して良好で着実な成果がみられるので、この点についてはおおいに自信をもってほしい。この上昇傾向を維持するために管理職の目配りと適切な指示をこれまで通り継続的に図ってほしい。一部の児童の言動に翻弄されるケースが目立つ学年に対しては人事上の措置を含めて重点的な配慮が特段に求められる。

しかしながら、現状では、授業を含め学級運営の成否が教員個人の力量に負うところが大きいため、学校全体で組織的な改善へ方向づけることが難しい。低・中・高学年の各ブロックにおける教科研修会が予定されているものの不定期の開催であり、所期の目的である各ブロックの研修の日常化が実現していないのも惜まれる。子どもとの信頼関係づくりの基盤となるの

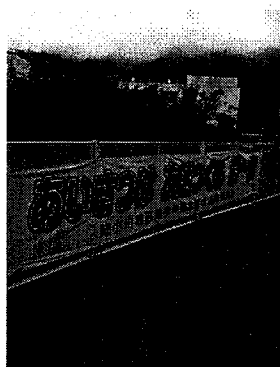
は、教員の「わかる授業ができる力」である。例えば算数の一単元を題材として、利用可能な教具や授業展開のヒントやアイデアを出し合う機会をあえて設定するなどの工夫も考えられてよい。加えて、一斉指導がスムーズに展開できない学年においては運動場での運動や体験的な活動には集中して取り組む姿勢もうかがえることから、教室内の活動のみならず外での活動を軸に授業規律の定着が検討されてもよい。授業に関して、好事例や先輩教員の知見に学ぶこと等を通して、若手教員の目を日常の授業の外に向ける機会をぜひ作っていただきたい。



授業改善が第一にあり、教員が授業力をつけることは大切だが、急に目を輝かせる授業は一朝一夕にはできないものである。担任や学年の問題ではなく、全校全教職員で子どもが落ち着ける状況を作るためにも、学年を超えての交流、授業者の交代など今できることを実際に動いて取り組んでみることも大切である。

生徒指導上特別な配慮を必要とする児童のための非常勤講師も県から派遣され、一応の人的手当はなされているように見受けられるが、来年度以降も確実な確保が不可欠である。かかる学校組織・校務分掌の観点からいえば、小規模校の宿命ではあるが、特定の教員に過重な負担と期待が集中している傾向にある。これは決して望ましいこととはいえ、事実ほころびも見られ始めているので、校長による教員個人への日常的なサポートがこれまで以上に強く求められる。

本校は小規模であるため学年経営と学級経営が同じになる1学年1学級の学校の人材育成の難しさを感じられる。通常、1学年複数学級の学校では学年内での若手教員の育成を考えると、校内人事では人材育成を考慮に置いて、学年の構成員を決定するものである。単学級の本校では、学年会に代替するものとして、低学年・中学年・高学年の部会をそれに充てるのが良いのではないか。その部会の中で、共通理解をはかり、研修をし、若手教員の育成をしていく体制が有効ではないかと考えられる。



重ねて強調すれば、地域と学校の関係は極めて良好であり、冒頭で述べた地域に育まれてきた伝統が今日でも息づいていることは特筆すべき本校のよさである。通学路のフェンスの補修や危険個所のチェック、運動場美化等についても自治会や育成会が積極的に関わっていることは希少な素晴らしい関係性である。平成21年の100周年記念事業の成功も地域と学校のつながりの深化に寄与している。PTAの参加もおやじの会の活動に象徴されるように総じて高い。子供会への加入率も98%とのことで、地域におけるスポーツ活動も活発であるという。地域の盆踊りや特有の季節・風習行事には本校のほとんどの児童が参加していることは本校の強みであることから、児童の生活規律の維持向上に関して、「狩小川子どもフェスタ」のみならず、数多くの地域の行事を今後戦略的に活用することをぜひ検討していただきたい。本校にとって地域のソーシャル・キャピタルの活用は極めて有効である。また、学校便りのビジュアル化や読みやすさを意識した紙面づくりがされていることは、地域にとっても非常に好評である。かかる地道な工夫や取組みの継続がさらなる地域と学校関係を深化させることにつながる。

以上のような総合的な評価と改善に向けての方向性を踏まえれば、現在の本校の教職員の努力や小規模校のよさを生かすために、次のことについて重点的に取り組んでいただきたい。

① 学校の周りの自然環境が大変すばらしく、落ち着いて学習する環境にはある。特に「水辺の学校」は、他の学校にはないもので、大いに活用が望まれる。そしてこの学校のよさの一つに「地域の強力な協力」がある。素晴らしい自然環境を活用することに加えて、地域の方々に学校の中に入ってきてもらったり、図書室の運営を手伝ってもらったりするなど、さらに多面的に活用する術を考案すること。



② 校長の強力なリーダーシップのもとで学校運営がなされていることは素晴らしいが、将来的な学校運営の点では若干の懸念がある。例えば校長は徐々に教頭を前面に出し、教頭は教務主任、生徒指導主事等、学校運営のリーダーを前面に出す様な学校運営の体制作りに配慮し、誰が抜けても、体制が維持できるような組織作りにも展望をもってあたっていただきたいこと。

③ 授業研究を行い、全員で授業効果を検証していくこと。

改善の方向性については「意見・提言」で述べるので、そこで指摘されていること、提案されていることのうちできることから着手してもらいたい。以下、重要な点をあらかじめ強調しておきたい。特に重要な部分についてはアンダーラインを付しておいた。

【学校運営について】

○ 現状では、校長の優れたリーダーシップに依拠して教育活動が展開されている。すなわち、教職員の教育活動も児童の学習活動も、地域とのつながりも校長の気づきやフットワークによって保たれているということである。また、意思決定が校長に集約されているので、素早く行動ができていくことは特筆される点である。



○ 反面、本校のおかれた状況を斟酌してもなお、校長が他人に任せることがなく、万事にコミットしているように見受けられる。中長期的な人材育成の観点に立つと、委任できる仕事は可能な限り教頭以下の教職員に委ねた方がよいだろう。

○ 教頭が目目の前の児童の行動対応（生徒指導）に追われており、とても疲弊している現状がある。当面、教頭が生徒指導以外の場面でも活躍できる環境を整える必要がある。校長は自分の意思を伝え、教頭を前面に出し、後方で支えることが大事である。人材育成には、「まかせて、待って、褒める」というスタンスが必要だろう。肯定的評価は人を育てるものである。

○ 家庭的にも、発達上も、様々な事情を抱えた児童が多く、教員がクラスをまとめるのに苦勞が多い。特にこれまでの1、2年生では2クラスであったのが3年生となった今年度から1クラスにまとめられたこともあり、3学年の学級運営に大きな困難が生じている。

- 担任の年度途中の交代によって、生徒指導全体にわたる負担が増している実態がみられる。こうしたなか、懸命に奮闘している教員のがんばりには敬意を表したい。
- 比較的規模が大きい小学校にみられる学年会のような教員同士の意思の疎通の場や研修の場が定例化されていないのは残念な点である。
- 小中連携の具体策がみえない。校長同士の話はできているようだが、具体的に高陽中学校区で何に取り組むのかについて計画を立てる段階にはいたっていない。
- 高学年には中学校への期待や将来の目標について話し合う時間を今まで以上にもってもらいたい。学年の後半には次学年への目標や中学校への目標などを立てさせることによって早めに希望を持たせたい。子どもたちが懂れる職業や将来の姿を考えさせることも重要である。尊敬できる大人や頑張る中学生の姿を見せることも考えられてよい。
- 校庭では、ブランコとタイヤとびの間隔が狭く、危険防止の配慮も必要である。また、踊り場で転んだ児童もみられ、ワックスの滑りにも配慮されたい。
- 来年度に向けて学校の実態（小規模校）に応じた学校組織の見直しを行う必要がある。必要な分掌かどうか検証し、小規模校の強みを活かした学校組織を作っていってほしい。

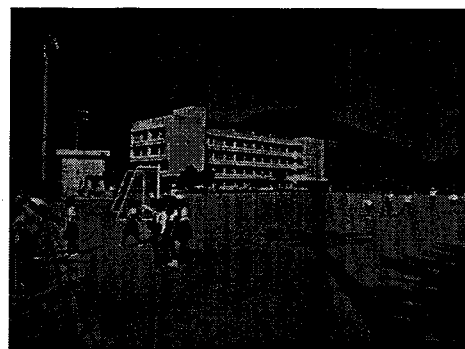
【教職員について】

- 教職員一人ひとりのひたむきな努力が随所にみられる。とりわけ若い教員の頑張りもあって、昼休憩時の外での遊び、掃除の時間でも児童と一緒に床を磨く姿など敬意を表すべき姿である。
- 1年生と5年生は教室環境の整理整頓がなされていて、落ち着いた環境であった。学習環境づくりも学級経営の重要な柱であるので大いに取り入れてもらいたい。掃除時間の指導がよくなされていたクラスもみられるので、学校全体の取組として意識化してほしい。
- 廊下や階段の掲示物の整理や掲示の工夫が欲しい。1階廊下階段などはポスターが雑然と貼られているので、もう少し意図をもった掲示の工夫が求められる。
- 全教室の授業の観察に基づけば、授業の基本となる部分が統一されていないように思える。例えば、発言の仕方（手を挙げて指名を受けて発言すること）、板書の仕方（「今日のめあて」から始まり「まとめ」で終わり、黒板全面を使うこと）といった点である。
- 児童機の配置を「コの字型」にしている意図が不明である。「コの字型」で話し合い活動に効果が出るのは、学習規律が成立していることが前提条件であるので、学習規律が成立するまでは全員が黒板の方向を向くように配置する方が落ち着いて学習できるのではないかと。再度検討してほしい点の一つである。
- 養護教諭は3学校間でよく情報を交換できているように見受けられた。ぜひ続けていってほしい。
- ただ、教員全体が一丸となって狩小川小全体を育てる意識があるかどうか強く伝わってこない。特別支援担当教員の役割や交流学級との関わり方（帰りの会、掃除、授業等）が明確になっているとも言い難いので、生活指導部を軸にして問題行動状況にある児童の家庭への働きかけを、少し「組織」として動く意識をもっていただきたい。

【児童について】

- 全体的に挨拶がよくできていて、小学生らしく素直で頑張っている児童が多い。純朴で心が優しく、大人と会話ができる児童が多いことも素晴らしい。

- 特に4階の4・5・6年の給食の様子からは、配膳・後かたづけのルールが浸透していて、自律的な行動ができる基盤は十分に整っているように見える。なお、給食調理員によれば本校は残菜が多く、時には20%に及ぶことがあるという（ちなみに平成25年度、市の平均は2.1%）。残菜率は担任の指導とも密接に関わり合いがあるので、給食指導や食育について定期的に考えさせる時間を作ったらどうだろうか。
- 昼休憩時、グラウンドに出ている子どもの数が少ない。「グラウンドで一生懸命遊んだ後の授業では落ち着きが出る」という経験則に立てば、積極的に教師もグラウンドに出る必要があるように感じる。
- 上述のように、落ち着けない児童、何らかの課題を抱えている児童、荒れた行動をとりがちな児童が少なく、教頭がかりっきりになっている姿や担任他複数の職員が対応する姿が日常的になっているように見受けられる。児童の心のケアができる人材を何としても確保できるように働きかけてほしい。そうした行動は家庭環境に起因することもあるので、市教委の担当課の助言を仰ぎつつ、今後は教員以外で対応できる人材の確保も不可欠であろう。



【家庭・地域と学校の関係、学校間の連携について】

- 地域が学校、子どもたちを「地域の宝」として捉え、極めて高い協力度と見守りや期待に満ちている学校である。
- 青少年健全育成協議会長の話からも学校と地域との関係は大変良好で、双方の意思の疎通もできており、それぞれの立場を理解したうえで共同して子どもの育成にあたっている姿は特筆すべき点である。
- したがって、上述したことではあるが、授業や児童の生活態度の指導について、もう一歩、もう一声踏み込んでいただければ本校のサポートになるものと考え。
- 狩小川小学校卒業の高陽中学校の生徒が「狩小川子どもフェスタ」の手伝いに来てくれるなど母校への支援がみられることは素晴らしい姿である。高陽中学校の吹奏楽部の演奏も企画・実施されるなどの行事を活用した小中連携の取組が展開されていることも、今後、ぜひ継続していただきたい。
- 小中連携については、校長間で話はできているものの具体策に欠けているのが現状である。前述の取組はみられるものの、3校でそろえるものが何なのかは踏み込めていない。特に、小中連携の授業研究については、研究テーマ等、浸透していないのではないか。
- 本校でも協同（共同、協働）学習をめざし取り組んでいるというが、様々な事情により中途半端になっていると言わざるを得ない。協同（共同、協働）学習には様々なとらえ方や主張が混在している現状がある。本校では（あるいは3校は）どの理論に依って立つのか明確にする必要があるのではないだろうか。現状では諸理論の様々な要素を取り入れようとするあまりに逆に混乱しているように見受けられた。
- 生徒指導に追われすぎている現状から、小中連携の必要性はあまりない、求めている、差し迫った課題ではないという雰囲気にある。ただ、小学校が変われば、中学校も変わる。中学校が変われば、小学校も変わる。小中連携を確かなものとし、学校が組織体として機能していくことを期待したい。

以上のように、本校への地域からのサポートは他の中学校区ではあり得ないほど協力的で強力である。地域が支えてくれている学校であるということを児童の声としてあがってくるように促していくことも今後の方策の一つではないだろうか。地域に愛されている、地域に感謝するというを、可能ならば3校が一緒になって発信する術を工夫してもらいたい。

狩小川小はこれまで道徳や平和教育を学校教育の重要な柱にしてきたわけであり、地域に感謝し、地域に尽くそうとする児童・生徒の育成を念頭におけば、地域との関わり方も児童会・生徒会に委ねていくことも可能となる。地域の協力体制が構築できている学校であるからこそ、小中連携を取りやすい環境にあることを大いに生かしてほしい。

2 意見・提言

評価チームは、上記の評価・分析結果に基づき、狩小川小学校及び教育委員会に対して、次のとおり意見・提言する。多くは上述の通りだが、改めて「学校運営」「授業・生徒指導」「家庭・地域との連携」の3領域に分け、今後着手しやすいように具体的な項目についてチェックリスト形式で提示した。もとより児童の様子や教職員の動静を勘案しながら柔軟に向き合ってもらいたいリストであることは言うまでもない。

(1) 狩小川小学校に対して

学校運営

- 本校で本当に必要な分掌とそうではない分掌を分類して再整理する。
- 校長と教頭に期待されている役割を、現状に即して話し合っ再確認する。
- 職員のがんばりに支えられているので、今まで以上に職員に「任せて、待って、褒める」というスタンスを持つようにする。
- 1週間に1度でも、低・中・高学年部会を定例化してみる。
- その部会において計画、課題、児童の問題点などの共通認識をする。随時校長出席のもとで、各部会を人事育成の場として位置づける。
- 協同（共同、協働）学習理論について理解を深めるために校内研修会を開催する。その際、指導主事等の来校をアレンジすることが望ましい。
- 研修会に引き続いて、小中3校で採用する協同（共同、協働）学習理論を共有する。
- さらに、例えば児童の学力をつけさせる方向性が定まったならば、職員の意識を高めるため、小中3校で目標（中学校ブロックのスタンダード）を作成する。
- 管理職が従来の学校経営目標（目指す子ども像：かんちゃん、こうちゃん等）について、職員をはじめ関係者にさらに意識化させるために、年間の行事を通して提示する。
- 今までに道徳や平和教育を学校の柱にしてきた歴史と実績がある。今後、地域に感謝し、地域に尽くそうとする児童の育成を念頭におくとするならば地域との関わり方の一部について児童会に委ねてみる。
- 学年の後半に、次年度の目標を立てさせ希望を持たせる機会を作る。
- 6年生には早期に中学校への目標などを立てさせるとともに、頑張る中学生の姿に触れられる機会を持たせる、
- ボランティアとして学習環境整備や図書指導、生徒指導を依頼できる保護者を募る。
- 管理職は教員の意欲が出るように理想や夢を大いに語る。
- 本校の事情に照らして必要な人材の確保を市教委に働きかける。

授業・生徒指導

- 隣のクラスが騒いだらケアしあう体制を確認する。子どもへの声かけ等、担任を支えあう体制を常に意識しておく。
- 全校をあげて子どもが落ち着ける状況を作るために、行事の取組や学年の枠を超えて交流する機会を持つ。
- 同様に（学年の枠を超えての）授業者交替や詩歌、文章の朗読の時間を確保する。
- 地域の方々の協力をどの場面でいただくのがもっとも望ましいか、優先順位を付けるなどして応援を依頼する。
- 児童に学力をつけさせることが大切であることを常に念頭に置いて、協同（共同、協働）学

習理論について再度学ぶ機会を持つ（上掲）。

- 目的を持った教室内の掲示物の展示に気を配る。見出しをつけ、各コーナーに分け、掲示物の配置も考慮すると効果的である。
- 授業中の発言の仕方のような基本的なものについて、1年～6年までの系統だった学習ルールを作る。
- 校内授業研究等の研修に「学習の基本」の1項目を設ける。
- 学習規律が成立するまでは、全員が黒板の方向を向くように配置する。
- 教職員がグラウンドで子どもと一緒に触れ合う時間を多く持つ。
- 残菜率を低くするために、日々の給食時の指導の積み重ねの必要性を意識する。

家庭・地域との関係

- 授業や生活態度等の指導に関わって、もう一步踏み込んでもらえる体制をつくる。
- これまで以上に、地域の方々との意見を共有できる場や機会を設け、それらを教職員全体で共有する。
- 地域の行事等について、例えば年に1回程度でもいいので本校の教職員がローテーションを組むなどして参加する。
- たとえば「総合的な学習の時間」に地域住民を招待し、子どもとの触れ合いの機会を作る。
- 「狩小川子どもフェスタ」を継続して開催するとともに、より充実したイベントとなるよう意見を出し合って企画する。
- 「狩小川子どもフェスタ」は5、6年生の合同行事とすることも検討する。これまで以上に地域を巻き込んで盛り上がることを期待されるとともに、何より高学年間の交流と5年生にがんばっている6年生をモデルとして見させる効果が期待できるからである。
- 「狩小川子どもフェスタ」等の行事に卒業生の応援もさらに継続する体制を整えるために、中学校への広報活動を行う。

(2) 教育委員会に対して

広島市教育委員会に対しては狩小川小学校に対して以下のような支援が強く求められる。市全体としての優先順位もあろうが、本校の置かれた状況の改善と教職員の授業力向上を促進するためには不可欠な支援であるため、ぜひ実現してもらいたい。

① 「協同（共同、協働）学習」理論に精通した外部講師の派遣による 校内研修の開催

現状では「協同（共同、協働）学習」が目指されているが、必ずしも十分に理解されな
いまま経過しているように見受けられる。本校児童の実態に合わせてどの学習理論に依拠
して進めていくか、職員一人ひとりが理解して取り組むことが重要であるためである。

② 管理職及びミドルリーダーを対象とした各研修機会の提供

中学校区の取り組みを緩やかに統一することにより小中3校で足並みをそろえる必要が
あるためである。この実施により生徒指導や学習指導における共通の指針をスローガンの
に掲げる契機となることを期待したい。3校の校長の連名での中学校区便り等の発信につ
いても後押しされたい。

③ 様々な取り組みにあたっての手続きの簡略化

小中学校の授業交流がスムーズに行えるよう、出前授業等の手続きの簡便化や小中学校
の裁量権を拡大していただきたい。

④ 特別支援に関して実績のある教員の確保（異動）

特別な支援を必要とする児童の行動に起因する授業規律の崩壊がみられ、その対応に窮する場面が多く見られた。次年度からはかかる力量を持った教員の配置が不可欠である。同時に、中心的役割を担っていた教員が異動するにあたって、力のある教員を後任として配置することに配慮していただきたい。

⑤ クラス編成の特別措置

1年生では35人学級、それ以上の学年は40人学級が法定されているが、本校のような特別に厳しい事情がみられる学校にこのルールを一律に適用することでその後の教育活動にとって著しい支障が生じることが懸念される。緊急的な手当として2クラスが1クラスに統合されるときに、児童の実態等に応じて従前通り2クラス体制を維持することへの配慮をお願いしたい。

⑥ 地域住民が学校の教育活動に参画できるための予算及び教職員が地域行事に参加するための予算の確保

地域住民の学校へのまなざしが温かい環境にあり、学校を影から応援している姿がみられる。かかる人的資本を学校の状況改善にぜひ役立てていただきたい。そのためには校長裁量予算として地域住民による本校児童の見守りに係る予算確保が強く要請される。同時に、地域行事への教員参加を促進するための手当支給をぜひ検討してほしい。

⑦ 地域と学校をつなぐことを専門とする職員の確保

上記のように、本校の地域とのつながりはほかに類を見ないほど強く、地域住民は学校の強力な応援団となっている。この強みを生かすには、たとえばコミュニティスクールを導入している他自治体にみられるように、適宜動ける地域との窓口を担う職員（非常勤）が本校にいれば、生徒指導や学習指導の状況改善にとって大きなサポートとなることが期待される。一考していただきたい。